

保幼小連携の基盤づくりプロジェクト

常葉大学 保育学部 保育学科 山本睦ゼミ

指導教員 : 教授 山本睦

参加学生 : 河合ゆめみ、大石彩加、志村奈保、早瀬紗良、
大竹円香、新貝まりあ、早川真白、酒井清正、
志賀徳南、水野鉄馬、竹内平治郎、永野海士

1 要約

平成30年の静岡県調査では、保幼小連携への取り組みに対して保育者は小学校教諭に比べて前向きではないことが明らかになっており、連携において双方にズレが起きていることが示された。また、令和3年7月には文部科学省に「架け橋特別委員会」が設立され、新しい時代に求められる資質・能力を持つ子ども達を育成するにあたり保幼小連携はますます重要視されることとなった。このような現状の中で本研究では、幼保小連携に関する認識のズレを解消し、かつ行政がその必要性について述べている理由を明確にするために、三島市の協力のもと「保幼小連携の基盤づくりプロジェクト」を立ち上げた。市役所職員、小学校教諭や保育者、保護者の方々と交流する場を設け、保幼小連携が地域一体となって行うべき県下全体の取り組みであるという理解を促進するとともに、異なる立場(市役所職員、小学校教諭、保育者、保護者)からの意見や現在の情報を共有する機会を設け、保幼小連携を行うことへの必要性について共有した。

2 研究の目的

2020年の学習指導要領の改訂により、新たな学力観とその教育方法について教育関係者間での認識の共有が急がれるなか、常葉大学山本睦ゼミでは「保幼小連携」について焦点を当て、本プロジェクトを進めてきた。

現在の小学校教育で起きている保幼小接続の認識に関するズレが起こす問題について、①生活の不適応(小1プロブレム)、②学習の不適応(9,10歳の節)が挙げられる。これらの問題が、就学前の子どもたちの経験を体系的に小学校教育と接続することによって改善されるのではないかと考えた。そのため、保育者・小学校教諭が保幼小連携に関する認識のズレを解消するとともに、その必要性について共有し、問題提起を図ることが本プロジェクトの目的であった。

3 研究の内容

保幼小連携を行う必要性に対する理解を深めるために、「保幼小連携の基礎作り研修会」を2度実施した。11月22日(火)三島市の公立園保育者を対象に、また12月17日(土)に本学常葉大学草薙キャンパスを会場とし、役所職員、小学校教諭、保育者及び保護者を対象に参加者を募り、研修会を実施した。

4 研究の成果

I	11月22日(火)	三島市立錦田幼稚園	「保幼小連携の基礎作り研修会」		
参加者	:	三島公立園保育者	16名	園長	4名
		学校教育課所属職員	2名	子ども保育課所属職員	2名

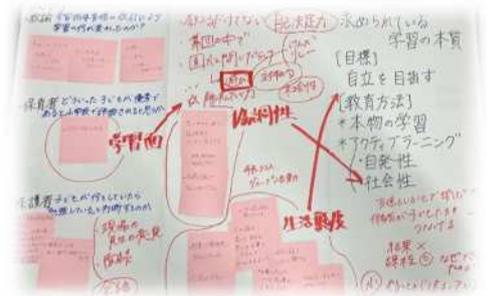
○プレゼンテーション

「5歳児の経験と9.10歳の節の繋がりについて学ぶ。」「保育所、幼稚園、小学校で生じている問題を共有する。」をテーマとし、プレゼンテーションを行なった。さらに、5歳と9.10歳の発達には繋がりがあることに對する根拠を用いて述べ、改めて幼児期の学びが子どもの育ちの基盤となっていることを示唆した。



○グループワーク

小学校で求められる子どもの姿を明確にしたうえで、どのような就学準備やカリキュラムを作成することが求められているのかを検討するため、トークテーマを『より良い接続を行なうためのアプローチ・カリキュラムとは、どのような内容のものが考えられるか。』と設定した。



○研修会を通して得た学び

学生がファシリテーターとしてグループワークに参加することで、実際に現場で働いている保育者の方々の意見を聞くことができ、現在取り組んでいる就学支援について具体的に知ることができた。またトークテーマを常に意識しながら、限られた時間の中で先生方の意見をまとめ、グループワークを展開したり、現場の様子をイメージしづらい部分においては、学生が質問して話を掘り下げたり、試行錯誤しながら取り組むことができた。研修会を通して、学校の講義では学ぶことのできない様々な経験を積むことができた。

II 12月17日(土) 常葉大学草薙キャンパス「保幼小連携の基礎作りプロジェクト」

参加者 : 市役所職員 3名 小学校教諭 4名
保育者 16名 保護者 4名



○プレゼンテーション

11月22日(火)に三島市で発表した内容に加え、現在求められている学力観を参加者が実際に体験できる時間を設けた。

○グループワーク

市役所職員・小学校教諭・保育者・保護者のそれぞれの立場から学習指導要領改訂に対してどのくらい理解が進んでいるのか、現状を書き出して頂き、現在目指すべきとされている「問いが立てられる子どもを育てるにはどう支援や援助を行えばよいのか」を検討した。

○研修会を通して得た学び

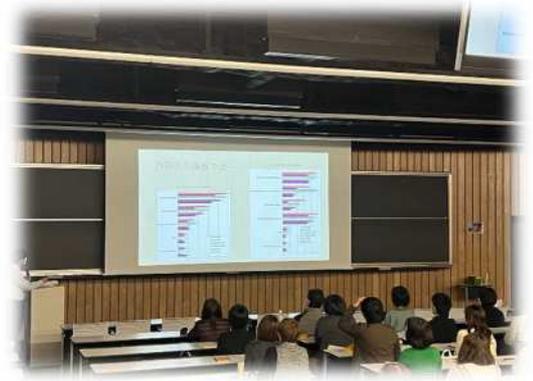
子どもが自ら問いを立てる場面について、保育者の方が子ども同士の砂場遊びを例に挙げ、「どうやったら高い山が作れるのか」、「水を含ませたらどうなるのか」といった具体的なエピソードを出してくださいました。その内容に小学校教諭の方は興味を示し、「現場でその知識を活かしたい」とおっしゃっていた。それぞれの立場が持つ知識や技術は異なり、だからこそ子どもの育ちを多角的に、かつ連続的に支援するためにも保幼小の連携が必要であることが理解、共有された。

◎質問紙調査結果



○調査の概要

2022年9月上旬に三島市の公立小学校教諭111名・公立保育者129名、計240名を対象にLOGOフォームにて質問の回収を行った。質問内容は、H30年度の幼児教育センターによってまとめられた「幼児期の教育と小学校教諭の円滑な接続に関する調査」をベースに50項目の質問を作成した。また「子どもにとって/大人にとって、保幼小連携が上手くいくとどのような効果が得られると思いますか。」「自分の担任経験の中で、9.10歳で躰く子どもを担当したことはありますか」という2つの記述項目を設定した。



1) 職種の違いによる認識のズレ

質問50項目において因子分析を行い「教員の交流」「子どもの交流」「現状意識」「必要能力」の4つの因子を抽出した。これらの因子すべてを従属変数に、「小学校教諭」と「保育者」を独立変数とし、対応のないt検定を行った。その結果全てにおいて、保育者の方が有意に高い結果が得られた。

因子名	水準	平均値	標準誤差	効果量 (d)	df	p値
教員の交流	小学校教諭	51.414	0.896	-0.636	238	.000 ***
	保育者	56.504	0.570			
子どもの交流	小学校教諭	35.658	0.791	-0.892	238	.000 ***
	保育者	42.318	0.579			
現状意識	小学校教諭	21.892	0.324	-2.682	238	.000 ***
	保育者	24.574	0.268			
必要能力	小学校教諭	43.901	0.552	-0.446	238	.001 ***
	保育者	46.132	0.365			

*.p<.05 **.p<.01 ***.p<.001

2) 保幼小連携の課題に対する認識のズレ

「現状の子ども同士の交流活動には課題がある」「保幼小連携において教職員間の相互参観、合同研修会、連絡協議会等の開催には課題がある」「教員間の情報共有や相互理解には課題がある」「目指す子どもの姿の共有や教育課程の編成等、園や学校運営における連携には課題がある」を従属変数に、「小学校教諭」と「保育者」を独立変数とし、対応のないt検定を行った。

その結果、全ての結果において、「保育者」の方が有意に高い結果が得られた。

質問項目	水準	平均値	標準誤差	効果量 (d)	df	p値
IV-1 現状の子ども同士の交流活動には課題がある	小学校教諭	3.441	0.087	-0.506	238	.000 ***
	保育者	3.884	0.073			
IV-2 保幼小連携において教職員等の相互参観、合同研修会、連絡協議会等の開催には課題がある	小学校教諭	3.135	0.086	-0.601	221.95	.000 ***
	保育者	3.651	0.071			
IV-3 職員間の情報共有や相互理解には課題がある	小学校教諭	3.153	0.087	-0.656	224.87	.000 ***
	保育者	3.729	0.074			
IV-4 目指す子どもの姿の共有や教育課程の編成等園や学校運営における連携には課題がある	小学校教諭	3.144	0.085	-0.602	224.90	.000 ***
	保育者	3.659	0.072			
IV-5 小学校/幼保では連携においてずれがあると感じる	小学校教諭	3.054	0.081	-0.790	238	.000 ***
	保育者	3.667	0.062			

*.p<0.5 **.p<0.1 ***.p<0.01

3) 保幼小連携がもたらす子どもへの効果の認識

質問紙の自由記述項目に関して、保幼小連携がもたらす子どもへの効果の認識に生じているズレを確認するために、回答の中から「不安の軽減」「つまずき」「グレーゾーン」「情報共有」「連続性」「スムーズ」「楽しさ」「期待」の8つのキーワードを抽出し、 χ^2 検定を行った。

その結果、「不安の軽減」「楽しさ」「連続性」の項目において保育者の方が有意に高い結果が得られた。

	職種：小学校教諭		職種：保育者		χ^2	Φ	結果
	実数値	残差値	実数値	残差値			
不安の軽減「なし」	64	▲	57	▽	3.491	0.136	*
不安の軽減「あり」	26	▽	43	▲			
つまずき「なし」	77		90		0.511	0.052	n.s.
つまずき「あり」	13		10				
グレーゾーン「なし」	81		93		0.232	0.035	n.s.
グレーゾーン「あり」	9		7				
情報共有「なし」	85		92		0.143	0.027	n.s.
情報共有「あり」	5		8				
連続性「なし」	88	▲	86	▽	7.061	0.193	*
連続性「あり」	2	▽	14	▲			
スムーズ「なし」	69	▽	88	▲	3.486	0.135	*
スムーズ「あり」	21	▲	12	▽			
楽しさ「なし」	89	▲	88	▽	7.186	0.194	*
楽しさ「あり」	1	▽	12	▲			
期待「なし」	89		94		1.962	0.102	n.s.
期待「あり」	1		6				

*.p < 0.5. **.p < 0.1.***.p < 0.01

調査の結果より、記述の項目では小学校教諭の「スムーズな接続」という語に関して、具体性がないという問題点が挙げられる。また、保育者の「不安の軽減」や「楽しさ」という語に関しては、情緒的なものであり、論理性に欠けるという問題点があると考えた。また、小学校教諭よりも保育者の方が、保幼小連携における分析の結果からポジティブな態度が見られた。一方で、小1プロブレムや9.10歳の節にあたる「つまずき」に関しては小学校教諭と保育者の双方で認識の差はないことも明らかとなった。現在、保育者は保幼小接続に対して、「楽しんでもらうため」「不安をなくすため」といった感情的な部分を重要視しているが、学習面や生活面のつまずきを引き起こす、認知発達及び教育的配慮の側面を意識しながら接続を行うことが必要であると考えた。そのため、保育者は小学校での学習内容を把握した上で、アプローチ・カリキュラムの作成に取り組むことが求められていると考えた。

5 地域への提言

実施した2回の研修会は、それぞれの立場から現在行われている保育、教育の情報を共有することができる有意義な時間になった。参加者の中には、小学校教諭から保護者になった方など、立場が変化した方も参加していたため、グループワークで経験したことや立場が変わって変化した考え方(保育にとっての遊びとは、学びであることを意味するなど)を話し合っている様子が見られた。普段ではあまり聞くことができない違う立場からの意見や現状の情報を共有することは、現在求められている子どもの姿を育むために必要だと痛感し、このような機会を設けることの意義を感じた。

6 地域からの評価

参加者を対象に研修会後に実施したアンケート調査から、以下のような貴重なご意見を頂いた。

- ・立場の違う方々の意見が聞けて良かった。お互いの歩みが重要であると感じた。
- ・新しい情報を学び、自分の考えが古かったと実感した。
- ・お互いの情報共有をどのようにしていくか再度検討するべきだと感じた。
- ・新活動を選ぶ「選択」という経験は保育の現場で意図的に設定していかなければならないと思った。
- ・保幼小連携では、気持ちの面を強く意識していたが、論理性のある面を意識していきたい。
- ・情報共有(保育者間、教員と保育者)が大切であると改めて感じた。

ご多忙の中、今回の調査にご協力いただいた三島市の担当者の方々並びに研修会に足を運んで下さった皆様へ、深く感謝申し上げます。本プロジェクトは現場の声を聴きながら、保幼小連携を行う必要性への理解に繋げることを意識し、全力で取り組んできました。

次年度以降は、本格的にアプローチ・カリキュラムの作成に活動への展開を検討しています。